

## 文体に注意を払って読むとは

阿部 公彦

## 1 小説を上手に読むために

小説といえば、かつてはヒマをもてあましたときに気晴らしに読むもの、気楽にぱらぱらめくるものという印象がありました。しかし、時は流れ、すっかり状況は変わりました。今や、若者は漫画でさえ読み方がわからない、うまく読めないという時代です。ましてや小説なんてどうやって読んだらいいのか皆目見当がつかない。手に取る気もしない。

そんな若者たちに対し、大人もなかなか「だから、小説を読まねばならないのだ!」と自信を持って提示できるような根拠がないのが実情ではないかと思えます。例えば「人生の深さについて知るのだ」とか「人間についての洞察を深めるのだ」といった戒めはしばしば便利に使われてきました。たしかに長く小説に親しんできた人なら、こうしたキャッチフレーズに「ふむ。そうだ」と即座にうなずくかもしれません。しかし、これから初めて小説を読もう、ましてや英語で、というような人にいきなりそんな立派なことを言っても辟易されるだけです。第一、『フランケンシュタイン』や『オリバー・ツイスト』や『ユリシーズ』のような作品を読まされて、「どうだ、人生の深みがわかったらう?」と言われても、なかなかぴんとこないという人が多いでしょう。どうして小説を読むことで人間についての深い洞察に至るのか、わかりやすく説明するのは相当難しいことなのです。

しかし、そこで諦めてはいけません。困ったときは原点に戻ればいい。小説に限らず、詩でも演劇でも、あるいは美術作品でもそうですが、作品鑑賞の手ほどきとして何より有効なのは、「作品というものは、作品の言葉(メディア)でしかうまく表せないものを表現しているのだ」という見方です。つまり、他の方法では言い換えのきかない、固有の表現法というもの

がそれぞれのジャンルにはある。もっと言うと、それぞれの作家ごとに、あるいは作品ごとに何らかの作法がある。そういう意味では、私たちは新しい作品と出会うたびに新しい表現の作法を学ぶわけです。その作法は何よりも言葉の使い方に表れています。ですから、小説の読み方の学習は、まずは小説の中でどのように言葉が機能しているかを知り、それとどのように付き合うかを体感することから始まります。

小説には登場人物がいて、プロットがあって、背景があって、そして文体もある、というふうに教えるやり方はたしかに便利なものです。私たちはもともと人間に関心を持っているので、登場人物の性格や、彼らのたどる運命にはつい引きこまれます。そういった面から小説に興味を持つのはまったく正しいことだと思います。しかし、プロットというのはあくまで言葉によって展開されるもの、人物は描かれるものです。受け身形なのです。小説作品の中で圧倒的に主導権を握っているのは言葉です。言葉の佇まいや運動こそが、プロットを生み出し、人物の匂いや味を醸成する。そのプロセスを読み取ることができなければ、小説などいくら読んでも退屈なだけ。とことん苦行です。鼻づまりのときに高級なワインを飲んだり、芳醇な焼き肉を食べたりしても、ちっともおいしくないのと一緒です。

文体というと、後からお化粧のようにして作品に乗っけられるものと考えられる人もいられるかもしれませんが、たしかに文体=スタイルという、着せ替え可能な衣装のように聞こえてしまう。まずはこの考え方を捨てる必要があるでしょう。それを文体と呼ぶかどうかはともかく、小説は言葉に始まって言葉に終わるものです。言葉の運動法則や、コードや、振る舞いのマナーを学ぶことこそが、小説を読むということの本質にもつながっているのです。

## 2 ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』の言語術

このあたりの事情を具体的に説明するために、以下、用例を絞って見ていきたいと思います。参考にするのは、ジョージ・エリオット (George Eliot) の大作『ミドルマーチ』(Middlemarch)です。究極のイギリス小説とも言われるこの作品を読むと、なるほど小説の言葉とはこのようにして構築され

るものか、と思わず溜息が出るほどの感慨にとらわれます。その佇まいは壮麗にして繊細、しかも内に秘めたエネルギーと運動感覚は鋼のようにしぶとく屈強、かつ優美になめらかで、知的にも冒険性に満ち、常に新しい驚きが待ち構えているといった具合です。

作品のタイトルは、舞台となるイギリスの架空の地方都市・ミドルマーチ(コヴェントリーがモデルとされています)からとられています。このことからわかるように物語は複数の重要人物から構成され、彼らのプロットが複雑にからむことで、ミドルマーチ全体、さらにはもっと大きな社会の人間模様がネットワークとして浮かび上がるという仕掛けになっています。その中心にいるのはドロシア・ブルックという女性なのですが、ここではあえてドロシアではなく、脇役的なガース夫人という人に注目し、彼女の登場にあたって言葉がどのように使われているかを確認してみたいと思います。

ミドルマーチの主要なプロットにからむのは、理想主義的ではあってもどこか現実的感覚の欠如したドロシアや、すぐれた頭脳と理念は持っても脆弱なところのある若き医師ターシアス・リドゲイトといった人物たちです。彼らは魅力的でもあるけれど、どこか危うさや弱さを抱えた人々として描かれています。だからこそ、その周辺から息を呑むようなスリリングなプロットも展開する。これに対し、ガース夫妻は非常に安定的な気質を持っており、地味ではあるけれど実はこの小説全体の倫理観の土台のようなものを作るとても大事な人物たちです。

以下の引用は第3部第24章からとられています。ガース夫妻の娘メアリーにはフレッドという恋人がいるのですが、このフレッドはガース氏から借りたお金が返せなくなってしまいます。フレッドは、どうやってこのことをガース氏に打ち明けようかと悩んでいるのですが、そこでガース夫人が初めて表舞台に登場します。この段落では、フレッドが自分の不始末を打ち明けるためにガース家にやってくる、その様子の描写から話が始まっています。

Mr. Garth was not at the office, and Fred rode on to his house, which was a little way outside the town—a homely place with an orchard in front of it, a rambling, old-fashioned, half-timbered building, which before the town

had spread had been a farm-house, but was now surrounded with the private gardens of the townsmen. We get the fonder of our houses if they have a physiognomy of their own, as our friends have. The Garth family, which was rather a large one, for Mary had four brothers and one sister, were very fond of their old house, from which all the best furniture had long been sold. Fred liked it too, knowing it by heart even to the attic which smelt deliciously of apples and quinces, and until to-day he had never come to it without pleasant expectations; but his heart beat uneasily now with the sense that he should probably have to make his confession before Mrs. Garth, of whom he was rather more in awe than of her husband. (227)

ここで注目したいのは3つのポイントです。(1)フレッドが馬に乗ってやってくる様の描かれ方。(2)「私たち」という視点の導入。(3)ガース夫人への言及のタイミング。

### 3 長文の使い方

まず(1)から見ていきましょう。フレッドがやってくる場面はやや長めの一文中で書かれています。ジョージ・エリオットの特徴として——また『ミドルマーチ』という作品全体を通してとも言えると思いますが——長いセンテンスの使い方がきわめて巧みです。文を長くすると明らかに読者には負荷がかかります。読者が英語を第一言語とするかどうかにかかわらずこれは言えるでしょう。つまり、文章としては不利になる。では、なぜエリオットはそのようなことを頻繁にするのか。あるいは、なぜここではこうした長い文になっているのか。

1つの理由はかなり明白です。ここではフレッドが馬に乗ってガース家にたどり着くまでの様子を、クローズアップ的に、つまり詳細を省略するよりも気の重い訪問に伴う心理的な時間経過をより如実に反映する形で描き出している。長い文はたいてい多くの挿入節や下部構造によって構成されるものですが、ここでも which was a little way outside the town—a homely place with an orchard in front of it, a rambling, old-fashioned, half-timbered